

資料紹介 朴烈の書

朴烈は、日本支配下における朝鮮民族主義運動の活動家で、天皇と皇太子の暗殺をねらった大逆事件（朴烈事件）の犯人とされた人物である。

今回紹介する朴烈の書は、秋田県大館で開業医をされていた佐藤亮氏の旧蔵資料で、横浜に現在お住まいのご息より当横浜市史資料室へ寄贈された。

大逆罪で有罪となった朴烈は、戦時中秋田刑務所大館支所に入所していた。その際、結核などを患っていた朴烈と、医師である佐藤亮氏は交流があったらしく、朴烈の出獄に当たって、自作の詩歌の書を贈られたという。

二三点ある内、二点は佐藤亮氏宛となっている。また、この二点を含む四点には、一九四五（昭和二〇）年秋冬の期日が入っていて、出獄の前後に書かれたことがわかる。

朴烈が獄中で短歌や漢詩を作っていたことはよく知られており、すでに紹介もされている（『独立指導者朴烈』新朝鮮建設同盟宣伝部、一九四六年）。

しかし、佐藤氏より寄贈された二三点の内一二点は、筆者が確認できた限りでは未紹介と思われる。また、すでに紹介されている詩歌についても、表記や送りがなど細かな相違点がある。

朴烈は、一九〇二（明治三五）年に朝鮮慶尚北道に生まれ、一九一九（大正八）年に東京に移り、民族主義運動

を始める。一九二二（大正一一）年に、横浜生まれの金子文子と出会い、夫婦となって、行動を共にすることになる。

一九二三（大正一二）年の関東大震災後、九月三日に二人は検束される。爆弾入手の計画があったため、爆発物取締罰則違反で起訴されたが、その爆弾で皇太子（後の昭和天皇）の婚儀をねらっていたという嫌疑により、事件は一挙に大逆事件へと発展した。背景には、震災後起きた朝鮮人虐殺の責任を、こうした扇動者に転嫁しようとする政府のねらいがあったともいわれる。

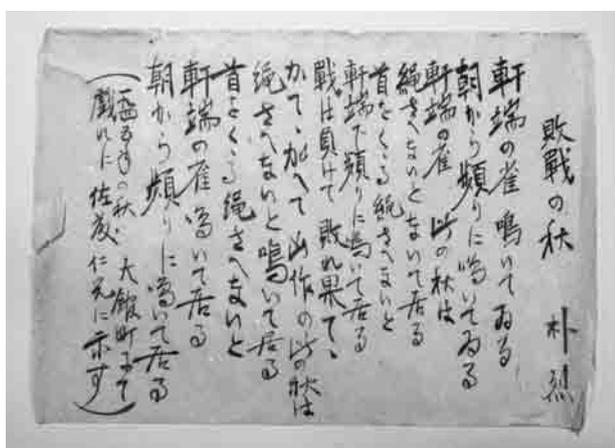
二人は、一九二六（大正一五）年三月に死刑の判決を受けるが、間もなく恩赦によって終身刑となった。しかし二人は恩赦を拒否して、断食などの抵抗を続け、金子文子は七月二三日に宇都宮刑務所内で自殺した。一方の朴烈は約一〇年後、転向して民族主義を放棄したという。そして、一九四五（昭和二〇）年一〇月、秋田刑務所大館支所から出獄するのである。

出獄後の朴烈は、翌一九四六（昭和二一）年一〇月結成の在日本朝鮮居留民団団長に就任した。一九四九（昭和二四）年に団長を退いて、韓国に帰国したが、朝鮮戦争の勃発により朝鮮民主主義人民共和国に移り、一九七四（昭和四九）年頃亡くなったとされる。

今回は、未紹介の詩歌からいくつかを紹介する。朴烈の詩歌は、獄中の孤独感や、皮肉で反骨精神旺盛な性格をよく表していると共に、季節感の描写など繊細な感受性をも感じさせる。

また、佐藤亮氏宛の詩歌では、朝鮮人として日本の敗戦を迎える複雑な心境をかいま見ることができる。

①未紹介の歌と句から
ふうくくと火を吹き起こす火吹き竹
誠心の火で家もあかるく



手は揉めど舌をべりりのはい太郎
世渡り上手恐ろし悲し
ほうふらや心ひとつで浮き沈み
明るい希望あせらぬ努力
梅の花咲くなら今ぞ寒の中
春咲かば珍しからじ寒の梅
此れはくさばくの中に花ひとつ

②佐藤亮氏宛の詩歌
敗戦の秋 朴烈
軒端の雀鳴いて居る
朝から頻りに鳴いて居る
軒端の雀此の秋は
縄さへないとないて居る
首をくく、る縄さへないと
戦は負けて敗れ果て、
かて、加へて凶作の此の秋は
縄さへないと鳴いて居る
首をくく、る縄さへないと
軒端の雀鳴いて居る
朝から頻りに鳴いて居る
一九四五年の秋 大館町にて
戯れに佐藤仁兄に示す

塵勞庵居士 朴烈
ひとすぢの誠に生くる君なれや
空に輝やく日の國の精
畏友佐藤亮仁兄大人に示す
一九四五年秋 大館町にて
(羽田博昭)

